Pickerlingの問題点は多くの注釈者が考えるように、「分類の未開形態」は「宗教生活」の最終的な方式化への序説にすぎないものであろうか。つまり両者の間には強調点の推移がみられ、研究方向の相違を示唆するものはないのかということなのである。これについてMary Hesseは二つの著作間に強調点に推移があることを指摘してきた。しかしその指摘には推移の性質がどんな内容なのかは明示されていない。[7] そこでPickerlingは両著作における主題事項、それぞれにおける宗教の役割の二つの点についての彼の見解をのべているのである。

II

そこでまずPickerlingの述べている点の要点をもう少し具体的にみていくことにする。Pickerlingの疑問は彼の大著「デュルケームの宗教社会学」において展開された議論の延長線上に立っていることはいうまでもない。さてPickerlingはデュルケームの著作は二つとも概念または抽象的範疇の分類であると一般に仮定されているが、実は「分類の未開形態」は分類の過程と整序づけの経験を強調しており右と左、男と女のような二分法と部族組織のような二分法的社会分類の存在を明かにしたものと見る。[8] さらにデュルケームの分類概念は序列的関係に立つことがあることを示唆するものと見る。「宗教生活」はこの分類考察を準拠すべき文献としてとりあげているが、そこで知識社会学に関係するものとされる問題領域は「分類」におけるものより広がっており、そこでは時間、空間、原因全体性などカントが認識論でとりあげた範疇がはいりこんでおり、それは物ごとを分類するものばかりではない。両著はまた集合表象 représentations collectirts に関係する著作であると見られているが、しかるに「分類の未開形態」の中にはいわゆる集合表象ははいってこないのである。ここでデュルケームの用語を調べてみると集合表象、概念、分類概念および範疇の四つの言葉はその間にある区別は十分つけられずに用いられていることがわかる。[9] それでデュルケームは分類概念とその機能を抽象的範疇と交互的に用いたりしている。こうした関係で二つの著作間には仮定される同一性の存在は疑問であり、またデュルケームの集合表象が歴史的変化に従って変っていく点も十分に区別されずにいるのである。W. S. F. Pickerlingはこのように両者を対照させながら、両者における真の主題は一般の人びとが考えているように言語の類似以外に共通点は少ないことを明かにしていくのである。そしてむしろ両者の間には大きい焦点の推移が見られることを指摘しているのである。[10] 焦点が異なればそこから出ずる結論も自ら相違してくるのである。「分類の未開形態」では基本的な説明要因は社会構造に求められるのに対して「宗教生活」においては抽象的範疇は宗教的思考の結果として見られてくるのである。[11]

従って「宗教生活」においては宗教が究極的に重要性をもってくるが、「分類」の場合には宗教は実質的に欠けている。ただ「分類」ではわずかに結論の部分において未開社会の分類の作用には感情の作用が介入することが多いことが指摘され、特に宗教的感情の力が強く作用してくることが認められているにすぎないのである。[12] つまり未開社会においては概念が純粋な悟性的概念ではなく、そこに感情が混入してきており、近代社会になるとともにこの概念の合理化が進んでくるという考え方を認めたような発言がなされているのである。この分類という純然たる大脳の冷静で批判的な接近と思われる作用の中に感情の導入は各方面からの批判の的であって、デュルケーム自身も感情の介入が厳密に分類することを困難ならしめることを認め、「科学的分類の歴史は結局この社会的感情の要素が漸次弱まっていき、個人の反省

7) M. Hesse, "Comments on the papers of Darod Bloor and Steven Lukes, *Studies, in the History and Philosothuy of Science*, 13 (1982). W. S. F. Pickerling, *op. cit.*, p. 52
8) *Op. cit.*, p. 53
9) *Op. cit.*, p. 54
10) *Op. cit.*, p. 57
11) *Ibid.*
12)「分類の未開形態」(小関訳) p. 93